

研究の記憶を記録にしよう



東海林 敦

学術分野に籍を置いていると、「和文誌不要論」はよく耳にしますし、実際にいくつかの和文学術論文誌が休刊もしくは廃刊に追いやられています。日本分析化学会の発足時（1952年）から発刊されている“伝統ある”『分析化学』誌でさえも、残念なことに20年前と比べると、年々、論文投稿数が減少する傾向が見られています。英語論文にこだわる研究者が多いのは今も昔も、20年前も大きく変わりませんので、論文投稿数の減少はもっと根深いところにあるように思われます。メディアでも度々取り上げられていますが、世界の論文数が増加しているのに対して、2013年以降、日本の論文数は減少に転じており、日本の科学技術力の低下が危惧されています。結局のところ、和文誌であろうと英文誌であろうと、日本の論文数は減少傾向にあることが現実なんです。

『分析化学』誌の論文投稿数は減少傾向にあるにもかかわらず、掲載論文の年間ダウンロード数は15~20万件にも達することから、『分析化学』誌を不要と結論付けるわけにはいきません。分析化学分野における先端研究の発表・発信の場としてだけでなく、多くの研究者、技術者や学生に対する伝承の場としても大いに役立っているものと思います。しかし、論文の書き手と読み手の人数のアンバランスが生じているのも事実です。

投稿論文数減少は、日々の煩雑な業務に追われ、論文執筆に集中できる時間を確保しにくいことが主要因であると思います。また、学術誌への論文投稿そのものに高い敷居を感じている方々も少なくないようです。高い技術を持ち、高度な製品を開発したにもかかわらず、コマーシャルレベルで終始してしまうのはあまりにも“MOTTAINAI”のではないのでしょうか。あまり難しいことは考えず、多大な議論をし、たゆまぬ努力により^{たどり}着いた研究・開発成果を“記憶”に留めておくだけでなく、“記録（論文）”として後世に残してみるのも粋なことではないでしょうか。苦勞して作成した論文がいざ掲載されたときの充実感や達成感を仲間と共有する喜びは格別です。ほんの些細な内容であっても、従来とは異なる視点で創案・創出された技術や手法、装置は、分析化学分野のみならず種々の分野の研究者・技術者にとって有用な情報となると思います。自身の研究成果が科学技術や産業の発展に役立つと想像するだけでも、胸が膨らみます。

『分析化学』誌では、“研究成果を記憶から記録に！”と挑戦する若手技術者・研究者々を対象として、「論文作成支援制度」を設けています。分析データの取りまとめから論文原稿執筆まで、10名の経験豊富なインストラクターが無料で論文作成をお手伝いいたします。また、科学技術や産業の発展に貢献する研究開発に対して「分析化学産業技術論文賞」を設けており、受賞者の方には分析化学討論会でご講演していただくことといたしました。『分析化学』誌が分析技術の発信そして伝承の場として貢献できるよう、編集委員一同が多くの努力を払っておりますので、ご支援とご協力の程よろしくお願い申し上げます。

[Atsushi SHOJI, 東京薬科大学, 「分析化学」前編集理事]